

生き物いっぱい 耕さない田んぼ 『不耕起栽培』 藤崎農場×カグヤ米

第70号 2018年7月2日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

カグヤ米の挑戦

千葉県香取市に生き物いっぱい 耕さない田んぼ「藤崎農場」があります。

5年ほど前からご縁を頂き、田植えと草刈り、稲刈りの時期に伺い
一緒にお手伝いをさせて頂いていました。

今年から藤崎農場さんの田んぼの一部をお借りすることになり、
カグヤ米を藤崎農場さんのご協力の元、育てていくことになりました。

5月の連休後に田植えをし約1か月半後、観測史上最も早い6月末の
梅雨の明け後に草取りへ伺いました。

今回は、草取りだけではなく竈ご飯を子どもたちと一緒に炊いたり、
「藤崎農場」の藤崎さん、郷さんに「不耕起栽培」などについて、
伺ったお話の内容も掲載しています。

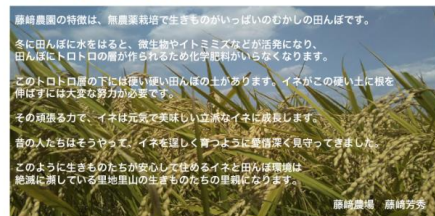
藤崎農場：fujisakifarm.com/

今年の田植え事情と『不耕起栽培』について

藤崎農場の藤崎さん、郷さんに「不耕起栽培」などについて、
お話を伺いました。

藤崎：今年は想定外なことがあった。例えば、後ろの田んぼを5年になるが何もしていない。1年目は草がいっぱい出て、3・4年目はジャンボタニシが増えて、去年もジャンボタニシが9月頃一杯いて、草が出なくていいなと思っていたら、1月の寒波で想定ジャンボタニシが死んでしまった。寒さに弱く普通のタニシは一杯いた。それがまず想定外。

生きもののいっぱいの『むかしの田んぼ』で
日本人のくらしの智慧（原風景）を
体験してみませんか？



■1回 2018年6月30日（土）10:00～16:00

午前の部 10:00～12:00	12:00～14:00	午後の部 14:00～16:00
田んぼのワークショップ 田んぼの中で“むかし”を 体験します。	だんらん みんなでかまどで炊いた おいしくご飯で囲みます。	稲刈り 体験したことを一円対価で 買い返します。 ※オプションで稲干し作りも

★参加料：¥3,000（材料・昼食費込）

★定員：15人（先着）

★場所：藤崎農場

千葉県香取郡郷之内3209番地

★持ち物：軍手・長靴

※雨天・台風等天候不順の場合は、会場を変更します。

※当日は雨でも濡れても大丈夫です。お持ちください。

カグヤでは、他にも色々な暮らしの
発見が待っています。

みんなの笑顔です！

株式会社カグヤ

TEL 03-5909-7155

藤崎農場 藤崎先生さん



2つ目は梅雨が終わって、今年の収穫時期が早く多分8月に稲刈りをする。稲刈はお盆終わってからの20日過ぎだが今年は早い。

郷：今年は収量がよくないかもしれない。葉っぱの数も少ない。

野見山：4月に植えたら6か月後に出来るのではないか。

藤崎：気候によって変わる。田植えしてからの積算温度によって違う。稲の場合は寒いくらいで豊熟した方がよくて、この辺は穂が出来てから35日くらいで出来る。東北は倍くらい違う。その二つが想定外で収量が悪いかもしれない。

野見山：昔、飢饉なんかがあったが藤崎さんのところはこれまでにありましたか？

藤崎：93年。梅雨が明けず8月5日くらいまで天気が悪くて、その時は例のタイから輸入した時がそう。タイ米が捨てられてタイの人が怒っていた。この辺は8割位取れたが東北は悪かった。ちょうど穂が出る10日くらい前から18度以下が続くと、採れないと覚悟しないといけない。穂が受精しなくなってしまう。昭和40年位に冷害があって採れなかったし、弱い品種は採れない。

郷：今はほとんどコシヒカリかこまちで何種類しかない。業務用のお米が足りない。飼料米と言って日本人の食も3食のうち1食位が米で、年間一人当たり53キロくらい食べていて、20年前は一俵（60キロ）近く食べていたが最近は食べなくなってきているので、昔の韓国みたいに混ぜご飯を食べると。今の日本はパンやうどんを食べているから1日のうちご飯は1食あるかどうか。朝はパンで、昼はラーメンを食べて、夜はビールを飲んじゃうとその日ご飯食べてない。もっとご飯を食べてくれないと米が余っているのにもっと余っちゃう。不耕起栽培は岩澤さんと藤崎さんが言い出し、耕さないで楽で、そこに稲を持っていくとあまり肥料を使わなくてよく建前として筋がつく。それをするために苗を普通の人は稚苗や成苗と言うが若い苗、葉っぱが2枚くらいのを作って、藤崎さんはそれを倍くらい作って大人の葉っぱが5枚くらいののを植える。田んぼを耕さないことはいいが、耕さない割に、は田植えが難しく機械も少なくなっている。表層の10cmをかき混ぜて今の田植え機で植えていく。不耕起の田植え機は、去年の苗の間に植えていく





が、ここ3年位はロータリーで平らにしてもっとやると普通の田植えと同じようにコンクリートを打ったようにちさいものを植えていく。不耕起と言うがあまり手を加えず、手を加えるとメダカなどが死んでしまうかもしれないし、環境をなるべく壊さない。一番は除草剤、化学薬品を入れてコントロールしない。草も虫も育てる考えでやっているのが今の不耕起栽培。岩澤さんが提唱していた時は矛盾と言うか、田んぼによっては使えないところもあり、冬場水を張れば草が生えないと言っても、実際には生えたりもした。不耕起栽培は物理的なダメージを与えないし、除草剤も蒔かないので、自然のまま稲を育てて雑草も虫も排除しないで、受け入れて草も増え過ぎたら取るとかそれくらい。田んぼを耕さないのは、草原もそのままで育っていると岩澤さんは言っていた。岩澤さんも初期の頃は除草剤も使っていた。

藤崎：今度、写真にして不耕起栽培を説明します。

野見山：草取りは全部取った方がお米の味などに影響しますか？

藤崎：影響しないね。

郷：個体差、場所によって同じ草でもスピードが違ったり分らない。全部きれいに取るのはいいと思うが、体が参ってしまうほとんど無視して、将来的に問題のある草、来年も問題になるものや多年草のものがあ
るが蔓延ると大変になる。これは完全に排除するが、ある程度は許容範囲で無視していいが来年問題を起こすものは排除する。来年も同じ状態で出てくるとしたら無視していてもいいよとする。草は見てて、早い時期に要所要所ででかくなりそうなものを取る。来年も問題になるというのを見極める必要がある。稗は稲よりも早いし、種が落ちたら10年続く。このまままでの収量は5表半くらい。肥料をもしやれば1俵半大目に採れる。肥料は有機肥料がある。鶏糞や魚粉を使うことになると思うが、カグやはしないと思いますが。

